OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	看護基礎教育における対人コミュニケーション スキルの教授方法と評価指標の検討
Author(s)	近藤, 純子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76472
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　近藤　純子　）	
論文題名	看護基礎教育における対人コミュニケーションスキルの教授方法と評価指標の検討

論文内容の要旨

【研究背景】

看護基礎教育において、看護実践能力につながるコミュニケーション能力の養成が求められている。しかし、養成のための教育内容や評価は各養成施設に一任されているのが現状である。コミュニケーション能力のうち、直接的看護ケアを実践する際に重要となる、対人コミュニケーション能力に焦点を当てることとした。

【研究目的】

①看護基礎教育における対人コミュニケーション能力向上に寄与する、効果的な教授法を検討する。

②対人コミュニケーション能力を把握する評価指標を作成する。

【研究1】

目的：看護学生の対人コミュニケーション能力習得状況に認められる特徴を知ることにより、対人コミュニケーション能力に関する教授方法の在り方を模索する。

〈ステップ1〉 方法：A大学看護学部に所属する2回生の女子看護学生88名。対人コミュニケーション技法習得に有用とされるマイクロカウンセリング技法（かかわり行動、傾聴技法）を取り入れたプログラムを実施した。

結果：習得度の平均値に関しては,かかわり行動では各項目4点以上であり、傾聴技法では各項目3点以上(範囲は1～5)であった。演習での困難箇所として、かかわり行動では1回目の話し手役、傾聴技法では1回目の聴き手役が最も高い割合であった。

結論：プログラムにおける習得状況は概ね良好であったが、傾聴技法は困難箇所に聴き手が挙がっている。かかわり行動よりも演習時間を確保する必要がある。教授法として、演習テーマの選定や演習時にテーマに関する話題を想起する時間を設けるなどの工夫点が示唆された。

〈ステップ2〉 方法：ステップ１受講1年後の3回生89名(再履修1名含む)。2回生にて習った技法を看護場面に活用する授業を実施した。マイクロ技法（傾聴技法）の学びの定着程度を確認した。

結果：使用頻度は「開かれた質問」,「いいかえ」の順に高かった。「要約」,「はげまし」は低い頻度であった。「はげまし」には、技法の意味と異なる援助関係を保証するような声かけが含まれていた。

結論：傾聴技法定着に関しては，話し手を理解するために「開かれた質問」,「いいかえ」が高頻度で用いられた。使用頻度の低い技法の意味を理解し演習できるよう、プログラム内容を検討する必要がある。

【研究2】

目的：看護基礎教育における対人コミュニケーション能力を評価するための尺度開発を目的とした。

方法：看護系大学3校の2回生208名を対象に、マイクロカウンセリング技法を参照した対人コミュニケーションスキル予備尺度原案と、特性的自己効力感尺度(成田ら,2005）にて無記名自記式質問紙調査を行った。

結果：対人コミュニケーションスキル予備尺度は、因子分析と項目の整理にて4因子構造20項目となった。各因子の信頼性係数は.80以上あり、特性的自己効力感尺度との相関は1%水準で認めた。

結論：看護基礎教育における評価指標の確立を目的に、看護学生版対人コミュニケーションスキル尺度の開発を試

みた。尺度はマイクロカウンセリング技法の枠組みに基づく構成で4因子20項目からなり、信頼性と基準関連妥当性が示された。

【まとめ】

研究1にて、看護基礎教育における対人コミュニケーション能力向上に寄与する、効果的な教授法を検討した。マイクロカウンセリング技法を導入することで、言動に技法名がつけられ、演習の評価が量的に可能となった。かかわり行動は習得度が高く、本研究のプログラム内容が効果的であったが、傾聴技法についてはプログラム時間の再考など内容自体に検討の余地が残った。

研究2にて、看護基礎教育における対人コミュニケーション能力を評価するための尺度開発を試みた。尺度はマイクロカウンセリング技法の枠組みに基づく構成で4因子20項目からなり、信頼性と基準関連妥当性が示された。しかし対象数が十分でなかった。尺度作成のためには、今後対象者を増やして尺度作成を行う必要がある。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　近藤　純子　）			
	（職）		氏　名
論文審査担当者	主 査	教授	神出　計
	副 査	教授	大野　ゆう子
	副 査	教授	井上　智子

論文審査の結果の要旨

論文内容の要旨

【研究背景】

看護基礎教育において、看護実践能力につながるコミュニケーション能力の養成が求められている。しかし、養成のための教育内容や評価は各養成施設に一任されているのが現状である。コミュニケーション能力のうち、直接的看護ケアを実践する際に重要となる、対人コミュニケーション能力に焦点を当てることとした。

【研究目的】

①看護基礎教育における対人コミュニケーション能力向上に寄与する、効果的な教授法を検討する。

②対人コミュニケーション能力を把握する評価指標を作成する。

【研究1】

目的：看護学生の対人コミュニケーション能力習得状況に認められる特徴を知ることにより、対人コミュニケーション能力に関する教授方法の在り方を模索する。

〈ステップ1〉方法：A大学看護学部に所属する2回生の女子看護学生88名。対人コミュニケーション技法習得に有用とされるマイクロカウンセリング技法（かかわり行動、傾聴技法）を取り入れたプログラムを実施した。

結果：習得度の平均値に関しては,かかわり行動では各項目4点以上であり、傾聴技法では各項目3点以上(範囲は1～5)であった。演習での困難箇所として、かかわり行動では1回目の話し手役、傾聴技法では1回目の聴き手役が最も高い割合であった。

結論：プログラムにおける習得状況は概ね良好であったが、傾聴技法は困難箇所に聴き手が挙がっている。かかわり行動よりも演習時間を確保する必要がある。教授法として、演習テーマの選定や演習時にテーマに関する話題を想起する時間を設けるなどの工夫点が示唆された。

〈ステップ2〉方法：ステップ１受講1年後の3回生89名(再履修1名含む)。2回生にて習った技法を看護場面に活用する授業を実施した。マイクロ技法（傾聴技法）の学びの定着程度を確認した。

結果：使用頻度は「開かれた質問」,「いいかえ」の順に高かった。「要約」,「はげまし」は低い頻度であった。「はげまし」には、技法の意味と異なる援助関係を保証するような声かけが含まれていた。

結論：傾聴技法定着に関しては，話し手を理解するために「開かれた質問」,「いいかえ」が高頻度で用いられた。使用頻度の低い技法の意味を理解し演習できるよう、プログラム内容を検討する必要があ

る。

【研究2】

目的：看護基礎教育における対人コミュニケーション能力を評価するための尺度開発を目的とした。

方法：看護系大学3校の2回生208名を対象に、マイクロカウンセリング技法を参照した対人コミュニケーションスキル予備尺度原案と、特性的自己効力感尺度(成田ら,2005) にて無記名自記式質問紙調査を行った。

結果：対人コミュニケーションスキル予備尺度は、因子分析と項目の整理にて4因子構造20項目となった。各因子の信頼性係数は.80以上あり、特性的自己効力感尺度との相関は1%水準で認めた。

結論：看護基礎教育における評価指標の確立を目的に、看護学生版対人コミュニケーションスキル尺度の開発を試みた。尺度はマイクロカウンセリング技法の枠組みに基づく構成で4因子20項目からなり、信頼性と基準関連妥当性が示された。

【まとめ】

研究1にて、看護基礎教育における対人コミュニケーション能力向上に寄与する、効果的な教授法を検討した。マイクロカウンセリング技法を導入することで、言動に技法名がつけられ、演習の評価が量的に可能となった。かかわり行動は習得度が高く、本研究のプログラム内容が効果的であったが、傾聴技法についてはプログラム時間の再考など内容自体に検討の余地が残った。

研究2にて、看護基礎教育における対人コミュニケーション能力を評価するための尺度開発を試みた。尺度はマイクロカウンセリング技法の枠組みに基づく構成で4因子20項目からなり、信頼性と基準関連妥当性が示された。しかし対象数が十分でなかった。尺度作成のためには、今後対象者を増やして尺度作成を行う必要がある。

本研究成果は看護基礎教育において極めて重要と考えられる対人コミュニケーション能力を客観的に評価し、効果的な教授法を模索した非常に重要な研究であると考えられた。これら一連の研究成果は看護学生教育のみならず、将来的には看護職コミュニケーションスキルの向上にも寄与する可能性があるため、博士（保健学）授与に値するものと判断された。